首輪付き（けもの）の大冒険

ネジの外れた旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

首輪付き（けもの）の大冒険

【Ｎコード】

Ｎ０２２６Ｚ

【作者名】

ネジの外れた旅人

【あらすじ】

死んだと思って目が覚めたらなぜかくびわつきけものという愛玩生物になってしまっていた。身長は５０ｃｍくらいになってるし喋れる言葉はまさかの「もふ」だけだと……？ご主人様っぽいそいつはまともじゃないし、平和な世界みたいだけどどうやって生きていけって言うんだ！？くびわつきけものの答えを求めるための愛玩的生き方＆大冒険が、いま、始まる。

もふもふ、もふ（終わりから、始めよう）＝プロローグ＝

光を伴う昏い昏い闇の底。矛盾しかない理不尽なその世界で、少年は、物心が付いた頃から、人を殺していた。

いや、それは、それらはもう、人とは呼べないのかもしれない。自らの体と、壊れてしまった意思を生かし続けるために、無様に必死にもがいて、自分ととりあえずの仲間を守るために自分の同種を殺し続ける。

少年はそんな世界に体が生み出され、当然のごとく心を壊され、そんな動物たちの仲間入りを果たした。

ただ、そんな少年は動物たちとは少し違う”適正”があった。いわばもクソも無いが、巨大な人殺しの機械を自由に操るための適正。

それは、ネクストと呼ばれていた。

コジマ粒子という猛毒の粒子を垂れ流す、最悪の盾を持ち、急激な身体、および精神的負荷と共に放たれる一瞬の爆発的な加速を矛とする、最悪の兵器。

それは単体では名実と共に地上において、否、その頃においてはすべてのものにとって最強の存在であった。

質量、総火力共に上回る存在も確かにあるにはあるのだが、ネクストは操縦者の技量と、その残酷で圧倒的なまでの汎用性とスピードであっさりと上回る。

彼はアスピナと呼ばれる、その技術研究をする組織の預かりとなり、実験の唯一の成功例として、非公式のネクスト操縦者となった。

その頃が、一番ひどかったのではないかと思う。
あらゆる精神負荷を掛けられ、定期的に戦場に送られ、人を殺す。大の大人でも悲鳴を上げて拒否するだろう。こんなものは誰だって耐えられるものではない。
だが、その時既に少年の心は壊され、擦り減り、もはや人としての心を維持してはいなかった。ただ、そのネクストの部品として生理的衝動と共に生きていた。

そんな無為な人生を歩む中、少年は生まれて二度目の敗北を喫した。相手は淡い赤をたたえるインテリオル・ユニオン製の曲面と放熱板を特徴とするＹ０１-ＴＥＬＬＵＳと呼ばれるその機体。
レールガンとレーザーライフルのラッシュにアスピナの細いオリジナルフレームが耐える事が出来る筈もなく、コアをマシンガンで集中的に狙い、ある程度の損害をＴＥＬＬＵＳに与えただけで大破。
死を覚悟した時に、幸か不幸か、自動脱出装置が作動し、彼の細い体は砂漠のど真ん中にほうりだされた。
そんな彼の目の前に、淡い赤をたたえるその機体の操縦者、霞スミカが降り立ち、恐らくは憐れみと共に手を差し伸べる。

彼は、何故と考えた。仮初めとはいえ戻る場所は彼女に奪われ、永遠に失った。贖罪？ふざけるな。そんなことをするくらいなら早く殺せ、と叫びたくなる。
だが、彼女を睨むために顔を上げると、その表情はおそらく、驚愕に変わった。彼女は右腕と右目から大量の血を垂れ流している。
彼はますます混乱した。こんなになりながら、何故自分を助けようなどと？分からない、分からない、ワカラナイ。
彼は、その答えを彼女から手に入れるために、傷だらけになりながら差しのべられた手を無意識のままにとっていた。
今でも、この選択は間違っていなかった、と誇って言えるもので

はないが、それでも、自分は生きる事が出来ている事に感謝した。
本来なら、既に死人も同然として、生きる事が出来る筈も無いのに、幻想を必死に追い続けた。

その最終地点、いま、ここですべてが終わる。

『あなたには、感謝している。……嬉しかったよ』

やや独特の響きを持つ、勇猛そうな声が鼓膜を叩く。狭い路地裏のようなそこで、二つのネクストが前を向いて進んでいた。
追いつめられた革命家にとどめを刺すため。…いや、これも恐らくは、一つの答えを得るために。

『……存外、甘い男なのだな、お前は。まあ、そんな傭兵も悪くはないがな』

焦がれ、追い続けたあの女(ひと)の声が、ノイズ越しに耳に入った。
甘い、か。確かにそうかもしれない。本当は自分以外の誰であろうとどうでもいいはずなのに、のうのうと空に生きる人々を救うためにこうしてこんなところに来ている。
結局は誰もかれも甘過ぎるのだ。どれだけ私情を捨てようと、しがらみにとらわれて、人を助けてしまう。
恐らくは革命家も甘い人間なのだろう。未来に生きる人々を生かすため、こうして世界最大の支柱(アルテリア)を落とすために、殺しに来ている。

結局、誰であろうと、人は人にすぎない。どれだけ頭が良かろうと、どれだけ強固な意志を持っていようと、どれだけ強かろうと。
ただ、この瞬間は、それがすべて。ウィンの言葉を借りれば、言葉を飾ることに、意味は無いのだから。

『お前たち、やはり、腐っては生きられぬか』

革命家の、悠然とした口調。カラードのランク1の頃のような冷淡な毒舌ではなく、どこか情熱的な焔を纏い、言葉を紡ぐ。
かくして、世界の命運を決める戦いが始まった。

まず動いたのは、カラード側。と、いっても実質革命家のもとに辿りつくためにブースターを噴かせていただけだが。
ウィンの駆るインテリオルの最新鋭機、ラトナが先行して、肩に装備されていたダブルハイレーザーの砲口をゆっくりと展開し、二機の狼藉者に狙いを定め。
俺の駆る旧レイレナード標準機、アリーヤがそのあとに続き、こちらもレイレナード製のモーターコブラをゆっくりと持ち上げる。
瞬間、ＯＲＣＡ旅団の駆る二機、アンサングと、スプリットムーンが違う方向にクイックブーストして散開した。

『…テルミドールは私がやろう。あなたは真改を頼む』

ウィンは通信でそれだけ言うと、軽量機であるラトナの背中からクイックブーストを噴射させ、黒と赤の逆足機体、アンサングに向かって彼我の距離を詰める。
となれば、俺の相手は無口な男、真改の操るスプリットムーンになる。

スプリットムーンは追加ブースターに物を言わせ、高速で俺の駆るアリーヤに向かってきていた。瞬間一度飛翔して、肩武装のロケットを放つ。
俺は横方向にクイックブーストを噴射させ難なくそれを避けると、まだ距離のあるスプリットムーンに左手のモーターコブラを構え、引き金を引きっぱなしにする。
マシンガンの弾は彼の機体の不可視の楯、プライマルアーマーに阻まれ、戦果を出す事は無かった。だが、ＰＡが阻む事によって生まれた波紋に、真改の動きは僅かに鈍り、隙を見せた。
当然見逃すはずもなく、前、左、前、右、とトリッキーな動きでスプリットムーンの視界を阻害しながら距離を詰め、右手に装備されたインテリオル製のレーザーブレード、ＬＢ－ＥＬＴＡＮＩＮを全力で横なぎに振るう。
衝撃で弾き飛ばされたのか、若しくはクイックブーストを噴かすことで難を逃れたのか、スプリットムーンは壁に勢いよく激突し、クイックターンで俺のアリーヤに狙いを定める。

「……浅かった…か、まあいい。先手は取った」
『…殺……！！』

気合いと共に真改の駆るスプリットムーンは、クイックブーストを前方に向けて噴射させ、俺との距離を詰めてきた。
俺は焦らずに通常のブーストでじわりと詰め寄る真改との距離を少しでも離そうと、ではなく、狙いをより正確な物にする為に、バックブースターを噴かせる。
瞬くことすら、現状では許されない。一瞬で真改の駆るスプリットムーンは俺のアリーヤとの距離を詰め、左に装着されていたひし形の物体から膨大な量の光をほとばしらせた。
ほぼ反射的な行動だった。俺は右にクイックブーストして、その

ままスプリットムーンとすれ違う。
高速でクラニアムの床を滑りながら遠ざかっていく、否、すぐさま距離をとり、クイックターンで切り返してきていたのだろう。
スプリットムーンはその気になればアリーヤの細いフレームを真っ二つに出来そうなレーザーブレードを振り上げながら迫っていた。
鬼気迫る速度ですぐさまクイックブーストを入力し、その脅威から逃れる。
その勢いのまま詰め寄ってきたスプリットムーンに、俺はすぐさまクイックターンで踵を返し、すれ違いざまに左腕に装備したモーターコブラを唸らせながら、スプリットムーンの左腕ごと奴のモーターコブラを引きちぎった。

「悪いな、真改。この勝負、俺が頂く」
『……。……させん…』

恐らく前半はＡＭＳを通して伝わる痛みに悶えていたのだろう。だが、苦し紛れに発されたその言葉には確固たる意志が含まれ、世界を変えるためのこれまでの覚悟があふれ出ているようにも思えた。
ますます、この男に負けるわけにはいかない。カラードの一員としてではなく、一人の男として。

「これで決める…！！」
『来い……』

俺は息もつかせぬスピードで宙を駆け回り、三角形のアンカーのような部品の先端から、蒼い光をほとばしらせる。対する真改はそんな俺を迷わず迎える様な形で、レーザーブレードを振り上げていた。
一瞬、とてつもない振動が、コクピットを襲い、決着がつく。

スプリットムーンは完全に残骸となり、そのコアは左半分が溶かしつくされ、コクピットに座る男の姿を露出させていた。対する俺のアリーヤもただでは済まなかったようで、機体の左腕が溶解し、原型すら分からなくなっている。
当然、左腕を斬り飛ばされるような感覚が残り、激痛を感じ、左腕を抑えて呻く。…まったく、仮想の痛みだというのに、いつまで経っても慣れないものは慣れないらしい。

『……無念…』

真改は、沈黙した。これで、最後。倒れたスプリットムーンを無視して、ウィンの駆るレイテルパラッシュとの戦闘を優勢に、粛々と進めている赤と黒の機体を視界の中央に納める。
レイテルパラッシュは相当な痛手を負っているようで、通信機からわずかに漏れ出たうめき声がそれを証明していた。
だがまぁそれは別にいい。この瞬間から奴の目標は俺となるのだから。

「テルミドール…ッ！」
『……やられたか…。いいだろう、こい、未熟者！』

俺は左腕を失ったまま、アンサングに襲いかかる。攻撃方法は近接戦闘のみ、舐めているわけではないが、ここで退けば確実にこのクラニアムは失われる。
それでは、意味が無い。まだ俺は答えを手に入れてはいないのだから。この最悪の反動家ならば答えを導いてくれるはずなのだ。
俺は離れた距離を一気に縮めるべく、横にクイックターンを入れながら、着実にクイックブーストで赤いレーザーバスーカの弾と、ＰＭミサイルと、マーヴの弾丸を回避していく。
機体が軽量化された分、より速く、そして死の淵に立たされ、脳

内麻薬が分泌されたらしく、より正確に。

「はぁぁぁっ！！」

俺は三連クイックブーストでアンサングの下を潜り抜け、死角に移動する。すぐさまクイックターンで視界の中央にアンサングを捉え、空気を切り裂く音を聞きながら距離を詰めた。

頭部と左腕、そしてコアの半分を切り裂かれたアンサングは、その衝撃に弾かれる、と思ったが変わらずに目の前で赤の複眼を輝かせている。

俺の腹部には冷たい感触が沁み渡り、何かがそこに突き刺さっている事を知覚した。

『悪いが、譲れんな。……だが…覚えておこう。貴様の意思も……』

「……」

体が、急激に冷えて行く。どうやら、カウンターでアリーヤのやや脆いコアをマーヴで突き刺されたらしい。装甲を貫通されたそれは寸分の違いもなく、俺の腹に突き刺さったということだろうか。

がしゃん、と重いモノが鉄の床に落とされたような音が響き渡り、それと同時に俺の体を揺らした。

「…俺は……答えを……？？？？？？？」

言葉ともいえなかったかもしれない、ひゅうひゅうと漏れでる息と共に意識は遠のいていく。目の端にはコクピットに走る火花がちろちろと徐々に徐々に勢力を拡大しているのが見えた気がした。瞬間、俺の体ごと、マーヴの突き刺さったアリーヤは、盛大に爆散し、この世界から消え失せた。

刹那、目が覚めた。見覚えの無い白い壁が真っ先に視界に飛び込んでくる。

見覚えの無い天井に困惑しつつ、むくりと体を起してかぶりを振って周りを見る。そこには、見覚えの無い赤みがかった髪色の、研究者然とした黒い隈を目の下に張り付けている女が居た。

「……もふ？（誰だ？）」

……ん？俺が何かがおかしい事に気付いたのは、割とすぐのことだった。

もふもふ、もふ（終わりから、始めよう）＝プロローグ＝（後書き）

カッとなってやった。本来こういうのは短篇であるべきなんだろうけどなんとなく。

大体後悔しかしてないけど連載すると宣言した以上こんな感じで始めてゆるりと進めていきたいと思います。

気に入った方は応援してくれるとうれしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0226z/

首輪付き（けもの）の大冒険

2011年11月30日23時50分発行